記憶

ぁぁちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶

【Ｎコード】
Ｎ４２６５Ａ

【作者名】
ぁぁちゃん

【あらすじ】
優奈の悲しい恋物語。あなたはもし大切なひとがこうなったらどうしますか？

出会い

ごめんね…

ードコにいるの…??

ー幸せになってね…。

私はまだ高校一年生だった。学校にも慣れ始めた、七月の夏休み前。
クラスはグループ別れをしていた。
特に目立つグループにいるわけでもないし、目立たないグループにいるわけでもない。
まぁ普通?中間あたりのグループ。
中学校から一緒の咲。
黒いセミロングの髪。くりっと丸い印象的な目は、その髪を二つに結わくと更に、ひきたった。
性格上、帰宅部。
その咲の彼氏、潤は自毛が茶色なのによく先生に注意されている。
その度笑ってごまかすのが、はたして本当にバスケ部のエースなのか……
私と瑠伊は恋人なし。
瑠伊はお洒落でいつも人とは違う格好をしてきたりする。
まぁ瑠伊も帰宅部。

「優奈～今日暇ぁ？」
咲が声をかけてきた。
（まぁ暇かなぁ。）
「優奈はいつでも暇じゃんねぇ」
瑠伊がケラケラ言ってきた。
「瑠伊！！！！よく分かってンじゃんかぁ。」

結局その日はいつものメンバーでカラオケに行く事になった。

「瑠伊～またその歌？？」
潤が冷やかす。
「いい加減忘れろよ～」
瑠伊はいつも決まった失恋ソングをうたう。
元彼との思い出の曲らしい。
（…なんで失恋ソングが思い出の曲なんだよ～）
（そんなに忘れられない程好きになる相手優奈にはとてもじゃないけど出来ないなぁ…。）

「はい～そこイチャつかないぃ～！！！！」
潤が咲に寄り掛かってるのを見て優奈はからかった。
「おまえもそろそろ彼氏位見つけろよ～」
潤が言い返した。

まぁいつもならこれで解散のはずだった。

始まり

「そんな優奈ちゃんのために～…今日は特別ゲストを呼びました！！！！」
瑠伊がはりきって言った。
（え…？？何？？）
三人は顔を見合わせてニヤニヤしている。
「皆なにぃ～！！！？？？」
優奈は自分だけ知らなくてショックだった。

「今日は俺のクラブの先輩達を呼びましたぁ！！！パチパチ～。」
（そういえば潤はバスケのクラブに通ってるんだっけぇ…。）
「それってどういう？？」
優奈はまだ混乱した状態だった。
「だからね潤は優奈のために先輩を紹介してくれるんだって～」
咲が言った。
（……紹介？？）
カラオケの扉が開いた。

初めて見る人が二人入ってきた。

一人はどう見てもスポーツマンで、爽やかな感じだった。Ｔシャツにジーパンというラフな格好。髪は薄茶のストレートで短め。

その人は尚人と言うらしい。自己紹介は慣れていない様子だった。

そしてもう一人が…それが裕だった。

こっちは音楽バカって感じだ。

髪は茶色で軽いアシメのウルフでくせっけ。ダテ眼鏡をかけていて、ジャケットを羽織っていて、これまたこういう人が着そうな穴が所々あいたジーパンをはいて。

自己紹介も慣れた感じだった。

（印象強い人だなぁ。）

「初めまして～裕って言って潤と同じクラブでバスケやってる、１８才です。一人暮らししながら仕事して趣味としてバンド活動してます～。よろしくねぇ～」

とまぁ慣れた感じ。

「俺は尚人って言います。大学に行きながら、一人暮らししていて中学からやってるバスケを今でも続けてるって感じです。」

皆次々と自己紹介をしていく。

とうとう優奈の番。

「…えっとぉ…優奈って言います。趣味でギターやってます〜。」
やっと話せたって感じ。
そんな優奈を見て裕は隣に座ってきた。

「優奈ちゃんって言うんだ〜俺は裕。優奈ちゃんが俺の事裕君って呼んで、俺が優奈ちゃんって呼べばいいんじゃない??」
裕がにっこりしながら言ってきた。

（軽そう…//）

それに比べて心は正直だ。
優奈はとてもじゃないけど裕の顔なんて見れなかった。心臓はドキドキしたまま。

No28

裕は趣味が同じだと思ったのか、やたら優奈に話し掛けてくる。

「優奈ちゃんってギター初めてどの位??」

「…まだ始めたばっかりです。高校入ってついこの前後夜祭でライブやりましたぁ。それがきっかけで続けてます。」

「俺はねヴォーカルなんだ♪そんな歌に自信はないんだけどさぁ。やっぱ楽しいよねぇ。」

優奈はこくりと頷いた。

瑠伊が向かいの席からニヤニヤしている。

ピロピロン

《裕さんといい感じだね》

瑠伊から突然のメール。

《…でも軽そう…;》

すぐ返事を返した優奈。

「優奈ちゃんＤｏＣｏＭｏなんだぁ!!!!残念だなぁ-…俺ヴォーダフォン。」

（何が残念なんだろう…）

ピロピロン

《優奈～携帯出してるって事はアド交換かぁ☆》

（…あ！！！！！）

「メール絵文字使えないねぇ…。」

裕が優奈の携帯をとった。

「はい、これ俺のアド。仲良くしてねぇ！！！！！」

この時少し裕が顔を赤らめた気がした。

（わぁぁ！！！！メールかぁ。）

「あ、仲良くしてくださいねぇ。」

優奈はとっさに返事をした。

夜になって解散。

優奈は皆と方向が違う為、一人で帰宅。

「ただいまぁ。」

優奈は言うだけ言って部屋に駆け込んだ。

（今日はお母さんいないのかなぁ。）

ベットに寝転がって、携帯をとりだした。
（瑠伊にメールでもしようかなぁ。）
ふと電話帳を開いた時、裕のことを思い出した。
（あ！！！！そういえば…）
電話帳を見て行くと、Ｎｏ２８に『裕君』とはいっていた。
「ふっ…」
優奈思わず笑ってしまった。
（自分で裕君だって！！！！）
知らずの間にメールを作成していた。
《裕さん☆だれだ～？》
―送信―。
（返ってくるのかなぁ。）
ピロピロン
「早ッ！！！！」
《優奈ちゃんでしょ♪》
裕から受信。
《よくわかりましたねぇ。優奈です。今日はなんか恥ずかしくて素

っ気なくてごめんなさい。》

―送信―

ピロピロン

《俺こそ謝らなきゃ。凄く軽そうな男に見えたでしょ？上がっちゃうといつも、ああなっちゃうんだ…》

裕から受信。

（そうだったんだ…。）

《あ、よかったぁ。裕さん～私そろそろ眠くなっちゃったんで寝ますねぇ。》

―送信―

優奈はお母さんが帰ってくる前に寝た…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4265a/

記憶

2011年1月19日12時41分発行